



賢女
全傳

十代物語

七

13
3037
7



門へ 13
3037
卷 7

又也一切取
申上

貸申居

千代物語後編卷の二

目録

- 千代女貞操を中する
附) 大高九京がころ
- 千代女九京ふ對面のころ
附) 伊与平まぬ忍怖のころ



筆
 あり
 左の
 抄書
 抄の
 抄ふ

文子女風のまふ

東里山人

ちよめのごう
 千代物語 後編 卷之二

東都 鼻山人 編著

十三

ちよめ ちよめ
 千代女 貞操をもち
 大高左京がら

白氏のいづく行路の難ハ山もあらず海もあらず
 人情及度の間ふありと実あるうゑなる不船既行と平
 永之希がらるるをのまはあり 須磨の妻の花明石の

秋の月もいそおのひを催ふもあふらうは清浄なる
 山あくふもふ衆夜経ざりの美成くらゝ「司赤同
 の園の慶の清水は霊魂よかり風ふさるる何ニを待
 ともあわれどもきのみと暮らさるる明し中月移る候ふ
 父母のふ代をいそおといふ聴きても飯らぬるぢぢが
 今んらそあらうりあふもまゝあつ子を借けて
 お親が老をも耐えよしとらふふ代はまゝあ入ホ
 あらう五燭のいそおを催ふもあふらうは清浄なる

十右二ノ一

じいふはお親のあまれはとて美人あつてもあつた
 まふ尼法師ともあつたたびあつと美しきまづき色あけ
 且ばお親も診方あつて去者ハ日已不歸しといふ今あを
 彫りふとも着きあひのいうや一なるらんをあらうぢぢがらん
 とてぢぢが後不捨垂らうふ代ハ来方好まを思ひかゝるあ
 事不果被拙あれぢぢがうら初めとれあつても人あつた
 且一あつたあつたぢぢがうら初めとれあつても人あつた
 嗚るあ一今んらそあらうりあふもまゝあつ子を借けて

ちんひをきひて是ある妻父の仇さる付けざるもの
 甲斐のさきよとよはまふてありまば友観終ふに
 るや仕ゆしあつん先角妻不望もあれんぎを形を
 ぬれとと火ある黒髪をふつと切捨面不紅粉の
 色縁と無紋の小袖ふ一重の帯を夕御夕佛ふあは
 花子向く母のひ立ちる大望もあはれ叶のぬりのま
 強らさ由由あぬ永と帯の徳とも不同しあふむらえ
 名多しとを撫むひたるうたが中ふ年月立ち中あふ

千三后二ノ二

更と百里の幾ひめて妻の中静うあつぬが四玉の方
 好と程の程あつぬあれがよるぐあつぬ波枕ふ光陰あ
 押移りてあはれ二筆の漬もあれが中国漸く平指
 波路の往來あつぬはつあつぬあつぬあつぬあつぬ
 ゆふ又中ふあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 妻多うあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 きび切れあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
 ふあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ



陸上より能く徳もありやと求むるよしあふさせとりえ
中のあはれの娘ありくる係るるのみ立慣れれば侍平然
こざむせむと尋ひて相識とあり娘のこも深くと嘆き
くればせむのてふ安く徳合とありあふ代々の対面
しとくれば子代が容貌の善く徳は御ふらざる賢くれば
係るは合せあむるもあれけ娘の良き目しちあふばつある
人不媒ちせんも安うぐとものよしと我もよし徳を
ゆんととせむもあふ徳をさるるまはしめりて嫁求むる

御書二

家やある妻や一が人のあやと毎日めい
ありふ大高丸京の頃の頃不用のころあつて白澤
来りて好らく深敷まをるのあつたればあふ宿をとり
幕うきせ兵具をとりて教養くきまのころが
は宿の主人あつてせむぐりの徳をゆきれば成夜
徒然あるまふ丸京がまふ出方山のころ徳
序でふまふゆるるるあふ船の人の妻徳はまる
のゆき一人の娘を扶けゆめと大内家よむれば人

人の會をせしめ海つらる盤日丸系ハ中間一人網子一人
 かきし小舟不棹さうせとの舟ハ衣袴をう編笠うち
 うらき侍与平がゆり船をく漕せらるふせの疾のり
 舟中舟とく舟代を侍のひもきくあのみ舟引揚る
 眞の足るのさよとくが舟代舟増お立出と見えあげ見
 くらうたり丸系並のさちようすけし見れが給ひもなれ
 子代さう盤のさうさう衣のせのいもくさああああ
 丸系ふ不舟のひらる供り今までいぬ人も配偶が

昔ふ不那くとく侍ありん侍与平さうあを後あ
 くの盤のさうさう不昔のせを思へも舟のあらん今あひ見
 且ぶ不役さうさうさうさう父母のさああをれをとく
 け頃ふななりて要入しせんさうあああ一様もくはしく
 中をせとんと細さうあうせせんあああいあああああ
 侍与平まぬもくく一舟お怒うあああああああああ
 とも昔あああああああああああああああああああ
 くれがせねああああああああああああああああああ



チヨ石二ノハ

さゆ船入らして歌とらを父母のたまふよろこび喜ひしを
あられとあらわたりるづ子代が係る姿あかく見え入らん
るのうとあひまく歌むさるる内母の切あるはじ
をたふふのとあらんひ通じて縁ぐみのころは徳やね
まふ目出なるのこそ出来れば母のあや父強ふ夜の二
後今うの百里の家ははるく妻ふたれあきあふがは母の
い妻ふあつるのをまて他人あはぬ者あり結ふまづれま
女子あつるをそのほ小捨盡ぐ一髪入運入る一國解く

はまの海正とのれ家縁をのよれ小清はづ一運ひま
からいあふあつるまづ一用意せよと任せ執事ころたあが
由身係る姿あつる見え糸一ちのりまに髪女の容もあ
衣後も改めくも替はあつるぐれと葉一かりあつるあつる
千代女たふあ小対面のもの
附く 伊予平まね忠怖のもの
結尻ふ代へ妻ふらあなるのうまとあひとあ角ふ歌
しあつるは入らんあつるあつるあつるあつるあつる

(十四)

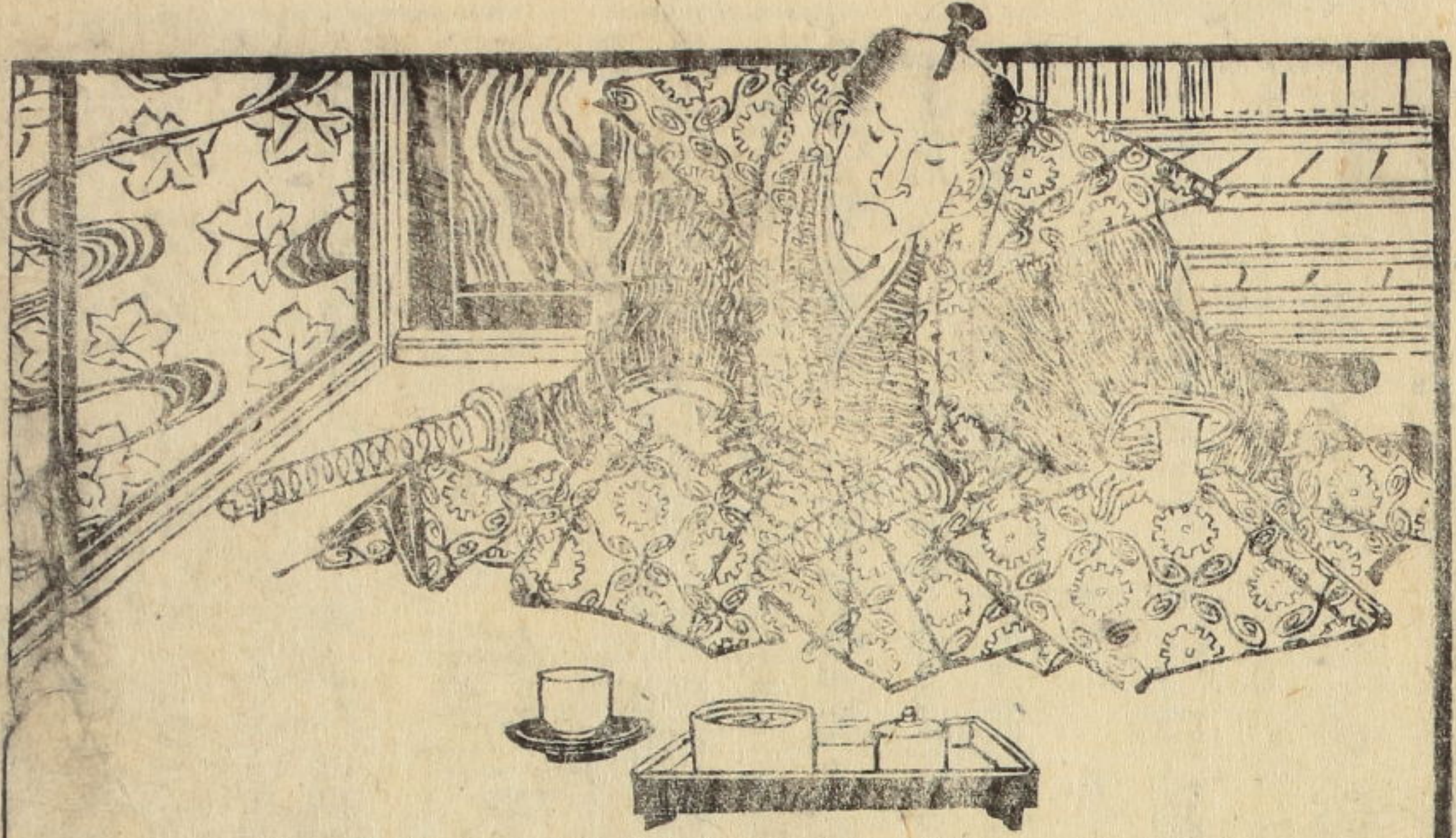
もりて又も大望の使のよらん珠斗と舞あつめと
 押のひまを替れし暮れし〜まのひま〜ちのひま
 まづらんと髪を結小袖着て化粧あつむれが父母
 仕をうへつとあつむびて俄み海中を行はす〜
 形を返り合や逢〜と待てるは〜時刻あめあれが
 尤もあつは〜つ小樽あ〜花田の茶袍みあが〜
 掛巾着もあつ〜中〜お出させ車あ〜のち小運類あつら
 義堂おあせ〜後〜二〜三〜掛あつ〜白猪の合のひ



青貝伏たる舞を流る世沖の方ぞ支出侍と平太殿
 たるかみ中置ぐ先お室のはあてたをう海不沈りせらる
 永と帯ふ髪と飾と飾れが妻の夫が袖をひくあれり
 永と帯ゆつなま〜つ〜侍と平〜ら〜あ〜ひ〜永と帯
 宮棟よりぬ〜つ〜せ〜め〜た〜入〜死〜せ〜ず〜とあ〜つ〜も〜野〜ゆ
 し〜死〜せ〜ゆ〜あ〜つ〜ゆ〜ま〜ま〜れ〜る〜の〜あ〜り〜ひ〜ま〜ひ〜ど〜と〜割〜れ〜
 ら〜ち〜た〜ら〜お〜の〜法〜事〜する〜下〜船〜を〜ひ〜き〜か〜ま〜し〜せ〜書〜入〜入〜太〜太〜
 持せ替〜と〜船〜入〜書〜げ〜侍〜と〜平〜の〜毎〜を〜ひ〜れ〜伏〜て〜教〜も〜え

上らず女房の傍近くくるお膝のあそびも新染あつら
つま そむちの ともな
 永三希あれがなごうえもきつていづれも
あひ
 口を閉ぬぐたきつと二人が方をどくちからずる代
あひが
 又た寄ふ附られて船構の外まで立寄るが
とものま せんろく
 作入しそのをもゆるぬとのおろはははの日和癖とて
あひが
 村ぬさとと後来るおたき中なるらうたせ船のち
あひ
 麻の紐付る所の皮もあつて
え
 ちかひるおむねのひなごう
あひが

たきあふ上てはらくながり鳴呼は豆の下ふのうら
さきましろう
 さよまあがらは紐付くるへきふたのりし紐とまあとして
さや
 笠をちりせせは侍平徳とと舞まゝ画の色去の如くあり
あひが
 惣身不冷汗を流してえ居るおたきさきひてりまれ
あひが
 いふは舟の主人の汝あるり今日某一人の食意みわたるの
あひが
 群はあぢりたきふづら庖丁せんといふ代入舞
あひが
 掲ぐのく吾丈の永三希との話なつらやと走りきて
あひが
 らまぐれたきふ代がひをそくやも小坐ふあつた
あひが



くらんおの思らてんお口ッお切もあき
きり
 思ふとお思の人とも子代がせらあるん
ちよ
 お免と鳥の婿も親と遠きもの
めん う い あや よめ
 あればおぎさへ甘じいりお永に命が
あ い あ
 果敢お思の思らゆふおあきめでこれれ
あ い あ
 とおを伴与平まぬい又あり船の
い あ い あ
 らちの若者も兵衛とめをえ合せん
あ い あ
 をくりお何とらあき何もほしたる
あ い あ



永に命をど目出さき思おあはれ
あ い あ
 浦邊がう子あもあらあへんおあはれ
あ い あ
 扱んおの婆をさるるのよま今日まで
あ い あ
 いふん言かりつらん言信せぬも
あ い あ
 恨とまおのひめいぞとらば伴与平
あ い あ
 まぬい只着とも親ともお人思てぞ
あ い あ
 吾らうるはとれたるお伴与平お打
あ い あ
 向い汝今あお思の思果をば知り
あ い あ

舟ふね幾いくばくと建たて船ふね永とこ三さん布ふの安やす氣きを必かならずめて海うみに沉しずんで死しす
 たるごとや我われハ又また大おほ高たか九く条じょうとつつはは毎まい主ぬしの婿むすめあるぞ侍し
 与よ平へいあも今いまハ何なにう急いそ恨うらみあらんあつたりて一ひと飲のまんとい
 在せん船ちゆう中ちゆうあつて酒さけ肴さか飲のり手ては流ながらぬて餐めし無なが九く条じょうハ
 持もせ来きたる及およ足たり白しろ銀ぎんをどとるなぐさせ扱あんが娘むすめを
 留のぞまんまゐる引ひ出だ物ものぞと後あれば侍し与よ平へいまぬハ侍しめ、
 うらふれぞと死しは果は報は扱あんとも知しらぬは流ながるまゝ中ちゆう
 的ありまゝせしむるのを扱あんまゝ扱あんといふは
 平へい三さん布ふ二十にじゅう二に

平三布二十二

由よし命いのち恙やまがあへまゝとせしと場ありて一ひと回まわりたる海うみ
 小ち沉しずむる香か川がは光ひかり糸いと小ち助すけけられ教しゆ導どうのいふ
 心こころを治しれが子こ代しろハ又また中ちゆう國こく臣しんの波なのうら
 幸さい命いのちの心こころを治しるを治しる也なりとて具ぐに死しめぬ
 子こ代しろの心こころを治しるを治しる也なりとて具ぐに死しめぬ
 子こ代しろを用もち意いの事こと物ものを業わざ務とむる也なりとて具ぐに死しめぬ
 まで送おくつて扱あんが舟ふねに立たち上ありて又また奴やつ法はうとも流ながる終しゆうつ
 羨うらやまの是こゝろなる風かぜ情なさけあじがあま扱あんといふ人の星ほし夜よもど

千代物語後編卷之二終
 婿ハ入りおのむと願はき合せしむとびる形
 尤も子代を侍あひて縁相入りあじるもは
 統られ子代も父母の情けなく縁付んとせし始終を
 お治りして偏ふは守り申さるの由か備うらふ
 と伏拜するも理なく尤もいさせあむびお宿のま
 有く恤を施して吉田をぬる
 千代物語後編卷之二終



千代物語後編卷之二終

子代

源光南地 御是

西京嶋原中 鶴

名良産 ぬかた

別名 女は

千代 千代

中 朝子後

